

## 講演

パウロの信仰について  
—パウロ年にちなんで—

阿部 包\*

## はじめに

現教皇ベネディクト十六世は、一昨年（2008年）6月28日から昨年（2009年）6月29日までを、パウロ年として宣言した<sup>1</sup>。それをうけて、この期間、（日本だけではなく、世界中の）各地でパウロ年を記念した講演会が開催された。筆者も、その間、札幌市および小樽市の小教区等に招かれて、パウロについて話す機会に恵まれた<sup>2</sup>。ここでは、その中から、札幌地区の北二十六条教会の司牧委員会から招かれて講演した際の実稿をもとに、話し言葉を文章言葉に改めて収録することとした。特に、このような機会を与えていただいた北26教会司牧委員会に、この場を借りて、感謝したい。

さて、今回のテーマは、パウロの信仰である。パウロは、新約聖書に収録された文書の中でも最初のものを書いた人物である。例えば、福音書の中で一番早く書かれたマルコでも70年であるが、テサロニケの信徒への手紙（第一）が書かれたのは、50～51年である。したがって、パウロの手紙群はキリスト教と呼ばれるようになる新しい集団がユダヤ教から独立しようとしていた時代を証言する最も重要な文書と言っても過言ではないのである。それゆえ、キリスト教の信仰を問う場合、パウロが信仰をどう捉えていたのかを、まずは確認するのが基本とされることになる。しかし、実はこの「パウロの信仰」という問題はそれほど簡単ではなく、パウロ研究者の間でも一致した理解は残念ながら得られていないほど、非常に微妙な問題を孕んでいるのである。

本稿では、最初に、パウロにおける信仰、つまり、パウロが信仰をどう捉えていたのかを考え、次にパウロの信仰、あるいはパウロが信仰をどう生きたのかについて、考察してみたいと思う。

雨宮慧神父<sup>3</sup>はじめ、多くの研究者が指摘するとおり、現在われわれが最も身近に用いている「聖書 新共同訳」は決して理想的な翻訳ではない。自分で新共同訳聖書の文脈を丹念に追って行って「変だな」と思ったら、翻訳を疑ってみるのも一つ大切なことなのである。そういうときには、是非ともどしどし近くの神父や私のような研究者に疑問を率直にぶつけてほしいものである。それが、神父や研究者を育てる力になるのである。本稿の最初のテーマである「パウロにおける信仰」という問題を理解する上で最も重要な箇所の場合も、「新共同訳」はパウロ自身が元来言わんとした事柄とはおそらく大きく隔たってしまう

---

\* 藤女子大学人間生活学科教授

いる。われわれが読むのは、むしろ後の神学的解釈を反映した翻訳文に過ぎない。知らないうちに、われわれはパウロ自身が書いた言葉の意味から離れて、われわれ自身にとって理解しやすい「信仰」の意味をそこから読み取ろうとしてしまっているように思われる。

## パウロにおける信仰とは

まず、パウロにおける信仰を理解する上で最も重要な聖書本文を次に引用する。

最初に新共同訳を読んでいただく。ローマの信徒への手紙<sup>43</sup>章のよく知られた箇所である。

「<sup>21</sup>ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。<sup>22</sup>すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。」

次に私訳を示すので、読んでいただきたい。

「<sup>21</sup>しかし今、律法と無関係に、神の義が、律法と預言者たちによって証言されつつ、表されました。<sup>22</sup>すなわち、イエス・キリスト（＝メシアであるイエス）の信仰をとおして信じる者すべてに及ぶ神の義です。違いは全くありません。」<sup>5</sup>

もちろん、違いは明らかで、下線を付した「イエス・キリスト<sup>6</sup>を信じることにより」（新共同訳）と「イエス・キリストの信仰をとおして」（私訳）の部分である。新共同訳が「イエス・キリストを信じること」と訳している語句はもともと πίστις Ἰησοῦ Χριστοῦ（ピステイス イエスー クリストウ）<sup>7</sup>という語句である。直訳すると「イエス・キリストの信仰」となる。

では、「イエス・キリストの信仰」をなぜ、新共同訳は「イエス・キリストを信じることにより」と訳するのであろうか。

背景にあるのは、クリスチャンの大きな先入観だと思われる。では、それは如何なるものであろうか。「イエス・キリストは信仰の対象ではあっても、信仰の主体ではあり得ない」というキリスト教「信仰」の常識的理解とでも言うべき事柄、あるいは、キリストはわれわれが信じる神の子であって、キリストが何かを信じることなどあり得ない！という先入観と言い換えてもよいだろう。この先入観が文法的に忠実に読もうとする読者（あるいは研究者・解釈者）の目を曇らせると言ってよい。

先に指摘したように信じて疑わない「信仰熱心」なクリスチャンは、イエスがユダヤ教徒として生涯を全うしたという事実に目を閉ざしがちである。福音書のイエスを読む場合も、手紙のパウロを読む場合も、われわれは後に著しい発展を遂げたキリスト教神学から少なくとも一旦は自由になる必要があると敢えて主張しておきたい<sup>8</sup>。パウロの場合、イエス・キリストを信じるわれわれの信仰（新共同訳「イエス・キリストを信じること」）が示すのは、まさにこの「われわれの信仰」に他なりません）は、メシアであるイエスの信仰に比べれば、厭くまでも二次的なもので、少なくとも高いとはいえない。

ところで、イエスがメシアである根拠は何であらうか。わざわざ根拠など詮索する必要

がないほど、これは自明の真理であろうか。キリスト教信仰にとっては、イエスがメシアであることは出発点であって、疑いを差し挟む余地のない事柄かもしれない。しかし、イエスがメシアであるのは、主なる神の意志を体現して生きそして死んだ、その生と死の全体が比類ないものだったからではなかろうか。まさに、イエスにおいて、神ご自身が生きそして自らの命をお献げになったという実感が、イエスをメシアとして告白させずにおかなかったのではなかろうか。もちろん、その背景に旧約における預言がイエスにおいて成就したという基本的な解釈の枠組みがあるにしても、である。ついでに言えば、「イエス・キリストを信じる」というほとんどクリスチャンの間で自明となってしまう言い回しも、「イエス・キリスト」が信仰告白という厳粛な行為とは切り離され、あたかもわれわれの氏名と変わらないものと化しているわれわれ現代の時代感覚を示しているのではあるまいか。

問題の箇所が「イエス・キリストの信仰をとおして」と訳されるべきである根拠は、続く文脈の内容にある。24～26節を次に読んでいただきたい。

最初から私訳で示す。

「<sup>24</sup> 人が義とされるのは、全くの賜物であり、キリスト・イエスにおける贖いをとおした神の恵みによるのです。<sup>25</sup> このキリストを神はその血における信仰をとおした宥めの供え物<sup>10</sup>として供えました。それは、既に為されてしまった罪を見逃すことによってご自身の義を示すためでした。<sup>26</sup> 神は忍耐して来られたのです。それは、今というこの時にご自身の義を、すなわちご自身が義しい方であり、またイエスの信仰に拠る者を義とする方を示すためでした。」

この24～26節は、22節の内容をパウロ自身が別の言葉を用いて敷衍した部分として読むと分かりやすい。下線を付した句、「キリスト・イエスにおける贖い」と「その血における信仰」に注目してほしい。パウロは、メシアであるイエスの信仰を、「贖い」と「血」と言い換えることができたのである。「贖い」と「血」から直ちに連想されるのは、明らかに、十字架の出来事である。

イエス・キリストの信仰という言葉でパウロが指し示したのは、このように、十字架の出来事であり、具体的な内容として挙げられるのは「贖い」であり、「血において示された信仰」だった、ということになる。そして、イエスが十字架上の死という形で示した信仰は、父なる神がご自身の義を示すため、ご自身が義しい方であること、また、イエスの信仰に拠って生きる者を義とする方を示すためであった、とパウロは主張しているのである<sup>11</sup>。

したがって、パウロが述べていることを敷衍するとは次のようになるであろう。

メシアであるイエスの信仰とは、神が全くの恵みとして人に与えたものであり、イエスにおいて示された贖い、十字架上の血において示された信仰であった。それは、神ご自身が供えた宥めの供え物、焼き尽くす献げ物に代わる新しい宥めの香りである。それをとおして、神は既に為されてしまった人々の罪を見逃し、ご自身の義を示された。イエスの信仰が実現した後は、神が義とするのは、このイエスの信仰に拠って歩む者なのだ、と。

## 召命体験

パウロにとっては、メシアであるイエスご自身の信仰こそが核心なのだということが理解されたであろうか。あくまでも、イエスの信仰が、われわれが神から義とされる根拠なのである。根拠は、けっして、われわれの信仰ではない。なぜなら、われわれの信仰の可能性それ自体がイエスの信仰を決定的な前提としているからである。イエスの信仰がわれわれの信仰の可能性の地平を開くと言ってもよい。

ここで、いささか話題を変えて、パウロの生涯の転回点について考えておかなければならない。通常、それは「回心」と呼ばれるが、これはルカの物語的な記述に基づく解釈に過ぎない<sup>12</sup>。しかし、「回心」という言葉が、回心する人間の側の能動的な契機を強調するニュアンスを持つとすれば<sup>13</sup>、少なくともパウロ自身の理解とは遠く隔たっていると言わなければならない。

ここは、やはりパウロ自身がどう捉えたかが重要なのである。

ガラテヤ 1 章 13～16 節を読んでみよう。やはり私訳<sup>14</sup>からである。

「<sup>13</sup> というのも、あなたがたは、ユダヤ人の宗教に徹していたわたしの以前の生き方を既に聞いています。すなわち、わたしは神の教会を際限なく迫害し、それを撲滅しようとしていました。<sup>14</sup> そして、ユダヤ人の宗教においては、わたしの同族の中の多くの同世代の者たちよりずっと先に進んでいましたし、わたしの父祖たち以来の伝承にとりわけ熱心な者でした。

<sup>15</sup> しかし、わたしの母の胎内（にいるとき）からわたしを選び分け、その恵みをとおして召し出した方〔である神〕が、自らよしと決めて、<sup>16</sup> わたしを使って異邦人たちのあいだにその御子を福音として伝えさせるために、わたしの中に御子を啓示したとき、直ちに、わたしは血肉とは相談せず、」（実際の文章は十六節以下に続く、ここでは省略する。）

パウロ自身のこの発言を使徒言行録の例えば 9 章 1～19 節前半部を比べてみよう。

ここでは、直接関係する箇所だけ抜粋して引用する。

「<sup>3</sup>…彼が旅をしてダマスコに近づいたとき、突然彼の周りを天からの光が照らした。<sup>4</sup> 彼は地に倒れ、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか』と言う声を聞いた。<sup>5</sup> 『あなたはどなたですか、主よ』と言うと、答えがあった。『わたしは、お前が迫害しているイエスだ。<sup>6</sup> 立ち上がって町に入れ。そうすれば、お前のなすべきことが告げ知らされるだろう。』」

中略して、次はアナニアに対する主の言葉である。

「<sup>15</sup>…彼に主は言われた。『行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らの前にわたしの名をもたらし、わたしが選んだ器である。……』」 ここで主と呼ばれているのも、文脈から判断して、主なる神ではなく主イエスである。

両者には大きな違いがある。パウロは、主なる神ご自身がその子イエスを指し示したと書いているのに対し、ルカは、復活したイエスがパウロに呼びかけ、彼を使徒として派遣

したと書いているのである。なぜ、このような違いが生じるのであろうか。

ところで、先にわれわれが読んだパウロ自身の言葉の背景には、エレミヤの召命記事が想定される。参考のために、エレミヤの召命記事を読んでおこう。

「<sup>4</sup>主の言葉がわたしに臨んだ。

<sup>5</sup>『わたしはあなたを母の胎内に造る前から

あなたを知っていた。

母の胎から生まれる前に

わたしはあなたを聖別し

諸国民の預言者として立てた。』」

どうであろうか。主導権を握っているのは、エレミヤの場合もパウロの場合も主なる神ご自身なのである。また、いずれも母の胎内にいるときから（あるいは母の胎内に造る前から）、異邦人に伝えさせるために（諸国民の預言者として）選び分け（聖別し）た、とある。パウロが他の重要な事柄の理解においても、エレミヤを参照しているだろうこと<sup>15</sup>を考えると、彼がここでもその決定的な体験を理解するモデルとして預言者エレミヤを参照したというのは大いにあり得ることである。ちなみに、諸国民は一般的にユダヤ人を除く諸々の民を指すので、実質的には異邦人と互換性がある用語なのである。

パウロ自身の記述から明らかになることは、彼があのだマスカス途上で起きたとされる出来事を、「回心」としてではなく、神の圧倒的な主導のもとに自分の身に降りかかった「召命」として受け止めたということである。少なくとも異邦人の使徒パウロは、主なる神ご自身が直接自分に呼びかけ、その使命を授けたと理解したのである。それは、ファリサイ派<sup>16</sup>の一員であったパウロにとって、預言者の召命という伝統に連なる体験であった。

ここで、先ほどの疑問に対する答えを推測しておきたい。もし彼の体験が、ルカ福音書記者が描くように「回心」であったとすれば、パウロは伝統的なユダヤ教から全く新しいキリスト教に言わば「改宗」したことになる。おそらくパウロより後の世代に属するルカは、自分たちの信仰の道がユダヤ教とは違う独立した道、すなわち新しい宗教としてのキリスト教なのだという理解を既に持っていたのであろう。その理解が、主なる神ではなく主イエスがパウロに呼びかけたとルカに書かせたのである。ルカはキリスト者が主と呼ぶのは、キリストであるイエスその方であって、父なる神はむしろイエスの背後に退いてその重要性は低下してしまっていると言うであろう。この点において、ルカはパウロと異なっていた。

誤解を恐れずに言えば、パウロは自分を、神の介入によってイエスをメシアとして受け入れたイスラエルと見做していたはずである。彼にとっては、メシアであるイエスの信仰の到来によって、イスラエルという概念も、割礼という概念も刷新された。かつてアブラハムが信仰のモデルとなり諸国民の祝福の基となったように、メシアであるイエスの信仰に拠る者こそイスラエルなのだパウロは主張するであろうし、割礼の本来の意味は目に見える体に施されたそれではなく、心に施されたそれなのだと主張するであろう<sup>17</sup>。

もう一つ指摘しておきたいことがある。それはパウロにおける神への熱心（熱情）の一貫性という問題である。教会の迫害者という姿も、実は神への徹底的な熱心（熱情）の表現であった。生粋のファリサイ人としてのパウロの活動は、召命体験を経た目から見れば、「損失」あるいは「塵あくた」以外の何ものでもなかった<sup>18</sup>のであるが、律法こそ神の意志の体現と信じて疑わない者にとって、神中心はすなわち律法中心である。そうなると、もはや、神への熱心は律法への熱心として表されるしか道はなくなる。律法に「木にかけられた死体は、神に呪われたもの」と記されている限り<sup>19</sup>、ファリサイ人が十字架上で処刑されたイエスを、自力でメシアと信じる道は完全に閉ざされていたのである。

ここで、敢えて単純化して言おうと思う。パウロは、預言者の召命というユダヤの伝統に自分の不可解な体験を重ね合わせることによって、神への熱心（熱情）という一本の揺ぎ無い線が自分の生涯を刺し貫いているのを感じたのではなからうか。

## 律法とメシアであるイエスの信仰

さて、パウロの理解をより明確化するために、召命の前と後とを対比して考えてみたいと思う。ポイントは、中心を占めるのは何か、である。先に指摘したとおり、召命前のファリサイ人パウロにとって、律法こそ神の意思の体現であるから、中心は律法と等値される限りでの神であった。しばしば律法主義と言われる所以である<sup>20</sup>。

召命という事件は、パウロの中で中心を占めていたその律法の代わりにメシアであるイエスを神ご自身が据えた出来事として捉えられなければならない。少なくとも、その体験を「召命」と理解するパウロはそう受け止めたのであった。こうして、中心は律法の業からイエスの信仰へと入れ替わった。かつて神の意志の体現であった律法はその役割を完了し、イエスの信仰こそ神の意志を体現するものであることが明らかに示されたのである。あるいは、イエスが登場するまで、神の正しさすなわち神の義は、律法に表されていると信じられていたのであるが、イエスの信仰が到来した今、神の義はイエスの信仰にこそ表れているというわけである。

パウロは、律法を比喩的に養育係<sup>21</sup>と呼ぶ。養育係というのは、ヘレニズム世界ではお馴染みの役割で通常奴隷がするものであった。ユダヤではシナゴグが宗教および教育施設として機能していたが、ギリシアやローマ世界の比較的裕福な市民階層の家庭では子どもの教育を奴隷である養育係に任せていた。子どもは、養育係の手ほどきによって一人前の礼儀作法や知識を身につけるわけである。しかし、子どももいつかは成人に達して養育係の手を離れる時がやってくる。パウロは、こうした躰や教育における養育係の限定的な役割が律法の説明にふさわしいと考え、律法を養育係に譬えて、メシアであるイエスの信仰の到来が養育係である律法の役割の終わりを告げている、としたわけである。

このように理解するパウロであるから、「すべて信じる者にとって、義に到達させてくださるキリストこそ、律法の目標だ<sup>22</sup>」と言うのである。律法はそれ自体では人を義に導いてはくれない。律法は、言わば反面教師として人をキリストへと導くだけである。パウロによれば、律法の業をとおして人が認識しうるのは正しい自分ではなく、罪に支配された自分に他ならないからである。この、罪に支配された人間というイメージは、律法の業によ

って神の前に正しい者として立とうとするユダヤ人だけに当てはまる訳ではない。ユダヤ人にとっての律法は、異邦人にとっては被造世界の現象であり良心である、とパウロは言う<sup>23</sup>。ユダヤ人は律法をとおして、異邦人は世界の現象や自分の良心をとおして神の意志を知り得る、という論法である。それにも拘らず、ユダヤ人は律法に違反し、異邦人は偶像崇拜に陥っている、とパウロは糾弾するのである。

そのような、誰もが罪を逃れられない世界に、今やメシアであるイエスの信仰が明らかに表された、と彼は言う。われわれは、イエスの信仰の姿を、福音書が様々に描き出す彼の活動や言葉にも、また、受難と十字架上的ご死去にも見る事ができるであろう。しかし、生前の弟子たちとは違って、パウロが描くイエスの信仰は圧倒的に十字架上の死に集中している。それは何故であろうか。

それは、イエスが弟子たちを集め、付き従う群衆を率いてガリラヤ地方で活動をしていたときも、エルサレムで最後のときを過ごしていたときも、十字架上で事切れたときも、潜伏していた弟子たちが予期しない復活体験に見舞われていたときも、パウロは一貫してファリサイ派の活動家だったためであろう、と思われる。生前のイエスの教えを直接聴く機会はパウロにはなかったであろう<sup>24</sup>。端的に言うと、生前のイエスについてパウロは十分な知識を持ち合わせていなかったものと思われるのである。しかも、イエスをメシアとしてパウロに伝えたのは、主なる神ご自身であった。少なくともパウロの理解によれば、人間の力とは無縁な形で彼はメシアであるイエスを受け入れたのである。

パウロにとって、イエスがメシアであるのは、主なる神がイエスを死者の中から立ち上がらせた<sup>25</sup>からであるし、そのメシアであるイエスを（正確にはイエスの信仰を）神ご自身が異邦世界に喜ばしい知らせ（福音）として伝えさせるために彼に直接呼びかけたからこそ、パウロは異邦人の使徒なのである。つまり、パウロは、イエスの重要性の核心を、その死と復活に見たのである。パウロにとって意味があるのは、イエスの十字架上の死であり、既に見たとおり、パウロはそれを信仰と表現し、「贖い」、「宥めの供え物」と言い換えることができた。「贖い」、「宥めの供え物」としてイエスを神が受け入れたことを示すが、復活という出来事であった。「立ち上がらせた」という言い回しは一見奇妙に響くが、やはり捨てがたいものがある。

## イエスの信仰は神の愛の行為

今まで述べてきたように、イエスの信仰がその十字架上の死に端的に示された事態を指すとすれば、それはまさに人間に対する神の愛の行為として理解できるであろう。ここで、パウロの説くところを参考にしながら要約してみたい。

信仰は、アブラハムがあのかのイサクの奉獻<sup>26</sup>という究極的な試練を乗り越えたときに、一度表された。その後、モーセの時代に出エジプトを体験したイスラエルの民は、神から十戒を中心とした律法を授かった。これは元来そこに神の意志が表されたものとして、聖なる教えである。しかし、それから彼らはカナンに定着し、わずか三代の王制<sup>27</sup>の後、王国の分裂と滅亡、同胞の離散や長期に亙る異民族の抑圧（アッシリア、バビロニア、ペルシア、ギリシア、シリア、ローマなど）という苦しみを体験してきたのであった。こうした

時代背景の中で、律法はそれを用いようとする人間の「肉」<sup>28</sup>の弱さの故に本来の聖性を発揮することができず、人間に罪の自覚を与える役割しか果たせなくなってしまった、というのである。パウロによれば、律法が人間の救いに役立たないのは律法それ自体に原因があるのではなく、人間が「肉」に従って生きているからなのである。いずれにしても、先に紹介したとおり、ユダヤ人は律法の故に罪の支配下にあり、異邦人は良心の故に同じく罪の支配下にある、というわけである。イエスが登場するのは、そうした罪の力に支配された世界のただ中であつた。ここで少しばかりわたしの空想を差し挟むことをお許しただけ。

わたしは、ノアの大洪水を思い起こすのである。世界がご自分の意志と相反する姿を呈したとき、神が取った措置は全世界的規模の圧倒的な破壊であつた。しかし、再び世界に平和が戻ったとき、神はもう二度と同じような全世界的規模の破壊は行なわないと自ら宣言し、生き延びた被造物との間に契約を結ぶ。その印が空に架かる虹であつた。その後、起こったのはいずれも局所的な破壊（バベルの塔、ソドムとゴモラなど）や異民族による度重なる厳しい抑圧などであつた。神は、必要なときには、士師たちを送り、預言者たちを送り続けた。神は自らの民の度重なる離反にも拘わらず、忍耐して待ったのである。そして、今度は人々の罪を見逃して、自らの正しさを示すためにイエスを送った<sup>29</sup>というわけである。イエスは、父なる神の意志を体現して、伝統的に遵守されてきた贖罪の献げ物に代わる宥めの供え物として十字架上でいのちを献げた。これこそ、パウロがイエスの信仰と呼ぶものに他ならないのである。

このように、イエスの信仰は、まさに人間に対してなされた神の愛の行為であつた<sup>30</sup>。神に対する徹底的な忠実があるところに神の愛は十全に働くのである。

## パウロの信仰

パウロは、主なる神ご自身によって、イエスこそメシアであることを知らされた。それは、逆説そのものであつた。なぜなら、神への熱心を貫いてきたファリサイ人パウロにとって十字架上で処刑されたイエスは「神に呪われたもの」に他ならなかつたにも拘らず、このイエスこそメシアだ、と神が告げたからである。イエスはその信仰を十字架上の死において示したが、それは同時に、神ご自身の正しさ、すなわち義が世界に現れたときでもあつた。また、その告知は、パウロにとってそのまま召命となつたのである。

召命前のファリサイ人パウロにとって、絶対的な位置を占めていたのは律法である。先に述べたとおり、神ご自身がその律法に換えてイエスを据えたのである。それが、メシアであるイエスである。召命後、パウロは「異邦人の使徒」として宣教活動に文字どおり邁進するが、それは、メシアであるイエスの信仰に依拠し続けた生であつた。イエスの信仰に依拠し続ける生、これこそ、パウロの信仰である。それを表す言葉をパウロは何度か書き記している。

代表的なものとして挙げなければならないのは、「もはや、わたしが生きているのではありません。わたしの中でキリストが生きているのです」<sup>31</sup>という言葉である。通常われわれは、生きているのは自分自身だと思っている。しかし、神によってメシアであるイエス



を告知されたパウロは、生きているのは自分ではなく、自分の中におられるキリストだと断言する。そこには如何なる躊躇も感じられない。メシアであるイエスの信仰が現実のものとなった世界の中で、生きているのはもはや「わたし」ではなく、「わたし」の中におられるキリストなのだ。これがパウロの実感であった<sup>32</sup>。それは、あたかも、それまで自分の中心に場所を占めていた律法を神ご自身が取り除いて、代わりにキリストを据えたかのようである。

パウロは、自分の弱さを誇るが、それはキリストの力が自分の中に宿るためであった<sup>33</sup>。われわれ日本人に馴染みの言い方をすれば、パウロは自分の中におられるキリストに生かされていた、と言ってもよいであろう。パウロにとって、キリスト抜きに生きることは成り立たない。そして、キリストは生前のイエスではなく、十字架上で死んで主なる神によって復活させられた（立ち上がらせられた）復活のキリストに他ならない。主なる神がイエスを復活させたことこそ、パウロの生きる力の源となる現実なのである。

パウロは、メシアであるイエスの信仰を伝えずにいられない。なぜなら、それは彼の内から湧き起こってきて彼を駆り立てる力だからである。彼の活動は、そうした力の自然の発露と言ってよい。メシアであるイエスの信仰を伝えずにいることは、パウロにとって不幸だっただけでなく、不可能だったであろう。自分を生かしている力を伝えないことは、彼にとって死を意味したからである。肉体はそれだけでは決して命ではない。神の息吹きが吹き込まれなければ、肉体は生きないのである。

## イエスの信仰とわれわれの信仰

先ほど、神に対する徹底的な忠実があるところに神の愛は十全に働く、と言った。イエスの生と死は、神の意志をそのまま体現したのものとして他に比肩するものがない。だからこそ、神は彼を「立ち上がらせた」のであった。しかし、イエスと同じ意味においてわれわれは神の子ではないが、われわれはみな、神の似像<sup>34</sup>（イマーゴ・デイ）として生きることを許されている。われわれ人間は、神の似像として生きるからこそ人間なのである。そんなことはキリスト者なら言われなくとも分かっている。しかし、理解していることと実践することとは別物なのである。それは、われわれが日常生活の中で嫌と言うほど体験している打ち消しようのない事実であろう。

今、わたしは理解と実践という言葉を使った。信仰は決して単なる理解ではない。これには誰も反対しないであろう。むしろ、信仰は実践である。いわゆる「行為」義認を否定し「信仰」義認しか認めないプロテスタントの面々は、信仰は実践だと言うと躓くのではないかと思うが、しかし、われわれが先に学んだパウロにおけるイエスの信仰からして、そもそも信仰は行為と対立するものではないのである<sup>35</sup>。パウロは、「キリスト・イエスにあれば、割礼も無割礼も何ら効力はなく、(効力があるのは) むしろ、愛をとおして働く信仰」<sup>36</sup>だと言う。つまり、パウロにとって信仰とは愛をとおして現実的に働くものなの以外の何物でもないのである。信仰は、もちろん、そのままの形では見えるものではない。しかし、それは、必ず具体的な愛の行動となって現れるものでもある。

ここで想起されるのは、神を愛することと隣人を愛することとの関係であろう。つまり、

神の教え（律法）の核心と言われる申命記 6 章 5 節とレビ記 19 章 18 節後半部との関係である。前者は、いわゆる「シェマー・イスラエル」<sup>37</sup>の中の一節、「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」というもの、後者は、「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」というものである。しかし、当然であるが、神を愛することは、具体的に隣人を愛することをとおしてでなければ表され得ない。なぜなら、隣人を愛さずに神を愛することはできないからである。あるいはまた、神を愛していると言いつつ、隣人を愛さない人は偽善者に他ならない、と言いつつ換えることもできよう。また、わたしは隣人を愛しているが、神など愛していないと言う人は、隣人と神との関係を知らないか、あるいは、自分が神を愛している事実にも不幸にも気付いていないだけか、どちらかであろう。他にも色々言い換えは十分可能であろう。

パウロは、ローマの信徒への手紙の勧告の部分で、「さて、わたしたち強い者は、強くない人々の諸々の弱さを担うべきであって、自分自身を喜ばせるべきではありません。わたしたちは各自、隣人を喜ばせるべきです。それが善いことになり、建設のためになるのです。というのは、キリストも御自身を喜ばせはしなかったからです。…忍耐と慰めの神が、あなたがたに、キリスト・イエスに倣って、互いに同じ思いを抱かせてくださいますように。」と書いている<sup>38</sup>。

重要なのは、もちろん、自分自身を喜ばせるのではなく隣人を喜ばせる、という言葉ある。それが、まさに、キリストに倣うことに通じるというのである。十字架の死に極まったメシアであるイエス自身の生の意味を考えると、徹底的に隣人を喜ばせる姿が浮かび上がるに違いない。「互いに重荷を担い合いなさい。そうすれば、あなたがたはキリストの律法を十全に満たすでしょう。」<sup>39</sup>というパウロの言葉も思い出される。

われわれの信仰の模範は、やはりイエスの信仰である。それは隣人を喜ばせることであるが、同時にそれは神を喜ばせることでもある。すべての人間が陥っていた罪の圧倒的な支配から人間を救い出そうという神の意志を体現して、イエスは十字架上で死に、神によって復活させられた。十字架というイエスの信仰の姿は、神の意志に対する徹底的な忠実さの表れなのである。われわれの信仰も、神の意志に対する忠実さという点では、イエスの信仰と異ならないはずである。そこに、「倣う」というわれわれの姿勢の根拠も生まれるであろう。

## おわりに

パウロがメシアであるイエスの信仰をどう捉えていたのか。そこから、本稿の考察は始まった。パウロにとって、イエスの信仰は決してわれわれが日常的に使っている「信じている」という事柄と同じではなかった。イエスの信仰は、十字架という極限の死において示された神の意志に対する彼の徹底的な忠実さの表れであり、同時に、それは神が正しい方であることを証言する出来事でもあった。

パウロは生前のイエスの言動にほとんど関心を示していないが、実際に信徒たちがどう生きるべきかについて勧告する際には、福音書に描かれたイエスの言葉や振る舞いと共通

するものを読者に感じさせる。互いに重荷を担い合う生。自分ではなく隣人を喜ばせる生。こうした生き方は、イエスの生き方そのものと言ってよいであろう。

そこに共通するのは、やはり父なる神の意志に如何に忠実に生きるか、という視点である。忠実さが重要なのであって、熱心さや熱情の度合いが重要なわけではない。しかし、父なる神の意志に対する忠実さが本物かどうか、それを測る尺度はあるのであろうか。堂々巡りのように聞こえるかもしれない、自分の欲求に従って生きるのではなく、隣人を喜ばせることを求めて生きる、ということに尽きるであろう。

そういう意味で言えば、われわれの信仰はけっして小難しい議論を必要としているわけではない。言わば、自己満足を廃した実践へと、メシアであるイエスの信仰はわれわれを派遣している、あるいは誘っている、と言えるであろう。

少なくともパウロの信仰は、けっして静的なものではなかった。むしろ、極めて活動的であった。パウロの信仰こそ行動であり、実践だったからである。それは、まさにイエスの生に倣った生と言ってよいであろう。なぜ、それが可能だったのであろうか。それは、彼が説明するように、この世的な欲望はすべて彼にあってはイエスの十字架と共に「死に体」となっていたからであろう。彼が徹底的に弱さを誇るることができるのは、そのためもあってのことであろう。

さて、最後に一つ疑問を呈して方向の結びとしたい。われわれは、「わたしが生きているのではなく、キリストがわたしの中で生きている」とはっきりと自信を持って言えるであろうか。それが実はパウロにとって、キリスト者であるかどうかを測る尺度だったのであるが。

- 1 2007年6月28日、「聖ペトロ・聖パウロ使徒の祭日の前晩の祈りの講話」の中で、聖パウロ生誕2000年を記念して「聖パウロの年」開催を発表した。女子パウロ会のホームページ Laudate、「特別企画 パウロ年」参照。そこには教皇の講話の日本語訳へのリンクおよびカトリック中央協議会の「特集パウロ年」へのリンクも貼られています。
- 2 他に、カトリック札幌地区宣教司牧評議会、カトリック札幌手稲教会、カトリック真駒内教会、カトリックカトリック小樽富岡教会、また、藤女子大学キリスト教文化研究所主催の公開講座でも「パウロ年」を記念して、三回の講座を受け持つ機会を得た。
- 3 1943年、東京都生まれ。上智大学神学部で神学修士、ヴァチカンの教皇庁立聖書研究所で聖書学修士。カトリック東京教区司祭、上智大学教授、真生会館聖書センター編集責任者。著書多数（NHK出版、オリエンズ宗教研究所など）。2010年度は、NHK教育テレビの「こころの時代、宗教・人生」で「福音書のことば」（上・下）を担当。
- 4 引用箇所を指示する場合、ローマの信徒への手紙は、本稿では「ローマ」と略記する。なお、引用文に付した上付き数字は節番号を示す。
- 5 引用する私訳は、原則として『『ローマの信徒のみなさんへ』私訳（Ⅰ）』、『藤女子大学キリスト教文化研究所 紀要』第5号、2004年3月、93～111頁（当該箇所は104頁）、に基づく。ただし、当該紀要に初出時は、われわれの箇所に出る「信仰」をまだ「信徒」と訳していた。なお、『『ローマの信徒のみなさんへ』私訳』は（Ⅱ）が同紀要第6号（2005年3月）、35～51頁、（Ⅲ）が同第7号（2006年3月）、106～121頁、（Ⅳ）が同第8号（2007年7月）、89～112頁にそれぞれ掲載されている。また、『『テサロニケの人々の教会へ』私訳』が、同第9号（2008年7月）、63～81頁、『『フィリピの信徒のみなさんへ』私訳』が同第10号（2009年7月）、頁、『『ガラテヤの信徒のみなさんへ』私訳』が『人間生活学研究』第14号（2007年3月）、藤女子大学人間生活学科、47～81頁にそれぞれ掲載されているし、『『コリントの信徒のみなさんへ 第一』私訳（Ⅰ）』がやはり『藤女子大学キリスト教文化研究所 紀要』第11号（2010年7月）に掲載予定である。
- 6 「イエス・キリスト」という言葉の元来の意味は、「メシアであるイエス」、あるいは「イエスはメシア！」という信仰告白文であった。ちなみに、メシアの原意は周知のとおり、「油注がれた者」であり、王の即位式の儀礼に由来する。メシアはしたがって、長らく異国の支配下に苦しんでいたイスラエルの民が将来ダビデ王の子孫として生まれ、自分たちに自由をもたらしてくれる政治・宗教的な王として待望されたのである。
- 7 実際には、διὰ（ディア）という前置詞の影響で πίστις（ピスティス）が πίστεως（ピステオース）になっている。文法的に言えば、このピステオースも続くイエスーもクリストウーもみな属格（「～の」を意味する語形）である。ピスティスは「忠実、忠誠、信頼、敬虔、信仰」などを意味する。
- 8 もちろん、私はキリスト教神学が常にイエスの実像やパウロの実像を探求する上で役立たずだとか有害だと言う積りはない。しかし、イエスの運動も、パウロの異邦人の使徒としての活動もキリスト教と呼ばれることになる宗教がまだ誕生する前のものだけということも知らなければならない。
- 9 「主なる」という言葉は、クリスチャンにとっては「主イエス・キリスト」以外にあり得ないであろう。しかし、少なくとも古代ユダヤ世界で生まれ育った者にとって、「主」とは先ず以って唯一の神を指したのである。イエスにとってはもちろんのこと、ファリサイ派の律法学者候補生であったパウロにとっても、そうだったはずである。後者は、その生涯の途中で他ならぬその主の召命を受けた結果、イエスをも「主」と呼ぶようになるが。  
神の名（tetragrammaton 神聖四文字、ローマナイズすると YHWH）は、おそらくヤハウェと発音したであろうが、十戒（decatalogue：神がモーセをとおしてイスラエルの民に授けた「10の言葉」）の第3番目に、神の名をみだりに唱えてはならないとあるために、神の名を示す四文字はそのまま読まずに、常にアドナイ（「わが主」を意味する）と発音する慣習が定着した。その結果、元来の読みが忘れ去られ、イエホヴァ（エホバ）と読むのではないかとの推測もなされるまでになったのは、周知のことであろう。

- 10 「宥めの供え物」という言葉の背景には、もちろん、レビ記一章に規定されている「焼き尽くす献げ物」という祭儀的儀礼がある。そこには牛、羊または山羊、鳥をそれぞれ献げる場合の詳細な決まりが記述されており、それぞれの最後の部分に「これが焼き尽くす献げ物であり、燃やして主にささげる宥めの香りである」と繰り返されている。
- 11 こう理解することを支持してくれる言葉として、「それゆえ、今わたしたちは彼の血において義とされたのですから、なおさら一層、彼をとおして怒りから救われるでしょう。」(ローマ 5 章 9 節)、さらに、「…わたしは律法に頼るわたしの義ではなく、キリストの信仰による義、すなわち信仰に基づく神からの義を持っています。」(フィリピ 3 章 9 節)を参照。
- 12 使徒言行録 9、22、26 章、参照。
- 13 「キリスト教においては、通常罪を悔い改めてイエスをキリストと告白する信仰を与えられることをさすが、回心するという表現人は人間の側でその変化を成し遂げるという能動的な契機が強調されている感じが強い。」『岩波 キリスト教辞典』、一九四頁、参照。
- 14 前掲(注 5)私訳、58 頁、参照。ただし、ἵνα (ヒナ) を目的(…ために)として訳文に表すために原文の順番を入れ替えている。原文の順番を生かせば、「わたしの中に御子を啓示して、異邦人たちのあいだにその御子を福音として伝えるように仕向けたが、直ちに、わたしは血肉とは相談せず、」のようにならぬ。
- 15 例えば、「割礼」に対する「心の割礼」という理解など。エレミヤ 4 章 4 節、9 章 25 節とローマ 2 章 28～29 節を比べよ。申命記 10 章 16 節、30 章 6 節も参照。
- 16 ファリサイ派は、基本的に民衆組織、それに対してサドカイ派は貴族層である。前者は、律法に適った生活を実践するため地道な研鑽に励んだ教師集団であったが、ファリサイ派の教師たちは手に職をもっている。パウロは、父親と同じテント職人であった。したがって、少なくともイエス時代には、律法の研鑽と教授は基本的に無償で行なわれていたのである。
- 17 ローマ 2 章 28～29 節、参照。
- 18 フィリピ 3 章 7～8 節、参照。
- 19 申命記 21 章 23 節、参照。「死体を木にかけたまま夜を過ごすことなく、必ずその日のうちに埋めねばならない。木にかけられた死体は、神に呪われたものだからである。あなたは、あなたの神、主が嗣業として与えられた土地を汚してはならない。」
- 20 ただし、召命前のパウロにとって、律法主義は批判の対象ではなかった。「律法主義」を批判的用語として用い得るのは、律法を神の意志の体現と見做さない者だけである。
- 21 ギリシア語で παιδαγωγός (パイダゴゴス) と呼ぶ。成り立ちは παῖς (パイシ: 子ども) + ἄγω (アゴ: 導く) である。
- 22 ローマ 10 章 4 節、参照。「目標」と訳した言葉は τέλος (テロス) で、「到達点、到達目標、終わり」などを意味する。律法はそれ自体で完結した役割を持つのではなく、キリスト、すなわちメシアこそ律法の到達すべき目標なのだパウロは主張する。
- 23 ローマ 1 章 20 節、12～15 節、参照。
- 24 ちなみに、最初の福音書マルコの執筆年は 70 年、新約聖書に収録された最初のパウロの手紙(テサロニケ 一)のそれは通常 50～51 年とされる。生前のイエスの言動に対する関心は、そもそも、その死と復活よりも後に喚起されたと考えてよいであろう。
- 25 「立ち上がらせた」は通常「復活させた」と訳される言葉 ἠγειρεν (エーゲイレン) < ἐγειρω (エゲイロー) の直訳です。なお、通常「復活した」と訳されるのは、「立ち上がらせられた」であって、「復活」という事態の主導権を握るのは厭くまでも主、つまり、創造者である神である。
- 26 創世記 12 章～22 章の「アブラハム物語」、特に 22 章、参照。この 22 章に描かれた出来事は、ユダヤ教では「イツハクの縛り」と呼ばれる。最初、アブラハムは神の約束(あなたに子を授け、子孫を大いなる民にするというもの)を人間的尺度で信じた(15 章 6 節、参照)。彼は、イシュマエルを授かるが、その子が子ども時代を終えようとする頃、神が二度に亘ってアブラハムに約束を告げる。アブラハムと妻サラから息子が生まれる、と。二人とも信じられずに心の中で笑ってしまう。神はそれを見逃さず、生まれる子を「イツハク」、すなわち「彼は笑った」と名づけよと命じる。この「彼は笑った」という一粒種の子が少年の頃、

- 
- 二人を見舞ったのが 22 章に描かれる「イツハクの縛り」という試練であった。レンブラントなどが見事に描いた迫真の場面を思い出す人も多いと思う。人間の思いで読めば、理不尽極まりない挿話には違いない。しかし、この究極的な試練を乗り越えたからこそ、アブラハムの信仰が確固たるものとして末永く記憶されることになったのである。
- 27 サウル、ダビデ、ソロモンによる。なお、パウロのヘブライ語名サウルは、初代の王の名に因む。
- 28 「肉」は、ギリシア語で σάρξ といい、パウロの場合、神の意志と対立する「この世的価値」を指す。
- 29 『ぶどう園と農夫』のたとえ(マタイ 21 章 33~46 節、マルコ 12 章 1~12 節、ルカ 20 章 9~19 節) 参照。
- 30 「しかし、神はご自身の愛をわたしたちに示されました。すなわち、わたしたちがまだ罪人だったときに、キリストがわたしたちのために死んでくださったのです。それゆえ、今わたしたちは彼の血において義とされたのですから、なおさら一層、彼をとおして怒りから救われるでしょう。」(ローマ 5 章 8~9)、参照。
- 31 ガラテヤ 2 章 20 節、参照。
- 32 「自分自身を試しなさい、あなたがたが信仰のうちにあるか、自分自身を吟味しなさい。それとも、あなたがたは自分自身を知らないのですか、イエス・キリスト(メシアであるイエス)があなたがたの中におられるということ。万一、あなたがたが失格者でなければ、ですが。」(2 コリント 13 章 5 節)、参照。また、「というのは、わたしはある一つのこと以外はあえて何も話そうとは思わないからです。それは、キリストが異邦人の従順のために、わたしをとおして、言葉と行ないによって、しるしや奇跡の力によって、[神の]霊の力によって、働かれた、というそのことです。」(同 15 章 18~19 節)、参照。さらに、「わたしの子どもたちよ、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、再びわたしは産みの苦しみを味わっています。」(ガラテヤ 4 章 19 節)、参照。
- 33 2 コリント 11 章 30 節、12 章 9 節、参照。
- 34 *Imago Dei*。かつては必ずこのように表記した。しかし、今や生活の必需品たるパソコンで、*nizou* と打って、変換キーを打って表記されるのは、「似姿」。現在では、こちらの表記も市民権を得てしまったようである。
- 35 パウロが対比するのは、行為と信仰ではない。正確に言うと、われわれの行為とわれわれの信仰を対比しているのではない。彼が対比しているのは律法の行為(律法の業、すなわち、律法の規定を遵守すれば神が義と認めてくださると信じて実践する行為)と信仰(この場合の信仰は、第一にメシアであるイエスの信仰)なのである。
- 36 ガラテヤ 5 章 6 節、参照。
- 37 「聞け、イスラエル!」。申命記 6 章 4~9 節、参照。
- 38 ローマ 15 章 1~3 節前半、5 節、参照。
- 39 ガラテヤ 6 章 2 節、参照。